

第1493回（2月26日）

島根県における過疎化の歴史的背景 （島根大農学部）榎 勇

かねてから私は、全県にさきがけて島根県において過疎化がおこり、激しい過疎現象に見舞われるところとなったのは、経済の高度成長によって、それまで農家の経済を支える重要な柱となっていた木炭生産や和牛飼育が振るわなくなった、ということもさることながら、より基本的には、歴史的要因に基づくものであったのではと考えていたが、本研究は、こうした問題意識のもとに、主として既存の統計資料を中心に、島根県の農業や農家の副業が、明治以降どのように推移してきたかについて検討したものである。

ところで本研究を通じて明らかになった点で特に注目しておきたい点を1、2指摘しておく、まず第1の点は、少なくとも山資源が、それなりの経済価値を持っていた昭和初期までは、島根県の山村は、相対的には恵まれた地域で、人口の収容力も大きかったのでは、ということと、それ故に、山資源の価値を失うことになったことによって、より過激な過疎現象に見舞われることになった、と考えられるのでは、という点についてである。

すなわち島根県の農山村の多くは、中国山地に属するが、ここは積雪量もあまり多くはない上に、山もそれほど急峻ではなく、また日照にも恵まれたところが多いので、それほど無理をすることもなく畑として利用できるところを、比較的容易に見いだすことができた。そして、そこでは麦をはじめとして粟、蕎麦、大豆、甘藷等々の食用作物は容易に自給できたが、一方、貨幣経済が浸透し、現金収入源が必要になってくると、それぞれの地域で、それなりのものを見いだすことができた。すなわち、奥出雲地方で、鉦製鉄が衰退し、それに関連する賃稼ぎがなくなり、鉦製鉄用炭の需要がなくなると、それに代わって

需要の増加してきた一般市場木炭の生産にきり換えることによって対応できたが、一方、このころから生糸の需要が増加したため養蚕業を導入することで現金収入源は一段と大きくなっていった。また、石見地方についてみると、ここでは、早くから商品作物の栽培がみられたが、ハゼや油桐といった古い形の商品作物に対する需要が減ると、大麻、楮、三桠を導入して対応し、さらにそれらに対する需要が減ると、養蚕や製炭、製茶等の副業を導入する等して、比較的豊かな現金収入源を確保することができたのであった。

いずれにしても、こうした比較的恵まれた条件のもとにあった島根県の農山村には、隅々にまで人が住むことになっていたのでは、というのが指摘しておきたいことの第一点であるが、続いて第二点目として指摘しておきたいのは、しかし、こうした状況も昭和初期、つまり農業恐慌期までであり、このあとは衰退の一途を辿り始めていた養蚕業に代わるものを見いだすことはできないままに、畑作地は荒廃の度を強め、すでに農業には活気はなくなり、ひとり活気を呈していたのは、戦時という異常な状況のもとにおいて需要が増加していた木炭の生産のみであった、ということである。つまり、現実に過疎化が起こるのは高度経済成長がはじまった昭和30年代の半ば以降であったが、島根県の山間地域の農村では、農業恐慌の洗礼を受けて以降は、農家の経済基盤はすでに崩壊し、何時過疎現象が起こっても不思議ではない状況にあった、ということである。